

# ホトトギス

十月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日印刷  
昭和五年十月一日発行  
第百二十六巻第十号



## 風雅の小筥「六十八」

廣太郎

平成十八年九月四日からホトトギス社は三菱ビルで業務を始める事となる。東銀ビルに比べると、少し部屋は狭くなったが、それでも句会の出来るスペース等は確保して、お客様を迎えるスペースも出来た。そして何と云ってもこのビルの立地条件が良いのである。丸ビルの有楽町側の隣といえど東京の方なら直ぐお判りになると思うが、向いには東京中央郵便局がある。JR東京駅や地下鉄各線は地下から直接このビルに出入りが出来、雨の日でも全く傘が要らないのである。やはり日本有数のオフィス街だけあって、便利この上も無い場所であった。

仕事だけではなく、この丸の内は、このコーナー「五十三」で触れたように、私が入社した頃は完全なオフィス街で、日曜日はまるでゴーストタウンの様相を呈していたと書いたが、丸ビルが建て替えられた頃から、夫のビルの一階等には有名ブランドの店が入ったり、レストランも大幅が増えて、昼は勿論、夜もディナーを楽しめるようになった。勿論土日もこれらの店は開いており、平日も含めて外国人観光客の姿が多く見られるようにもなったのである。そんな中、このコーナー「六十」で話題にした「サングリア」というカレーの店は覚えておられるだろうか。大手町ビルにあった店で、丸の内からは遠くなってしまったが、何とこの店の本店が三菱ビルから皇居側に一棟ビルを隔てた「岸本ビル」というビルの中に老舗としてあったのである。早速行くと、大手町ビルのその店と寸分も変わらない絶品カレーが味わえ、又楽しみが増えたのである。

## 旬日記 廣太郎

令和四年十月一日 芦屋ホトトギス会

江戸の空塗り替へてゆくむくの群  
園丁の空を自在に松手入  
颯風裡汀子遺愛の木の倒れ

十月二日 野分会芦屋例会

小鳥来て庭に奏でるレクイエム  
小鳥来る一樹失せたる汀子邸

十月二日 青嵐会芦屋例会

小鳥来るフランシスコに会ひたくて  
残菊や君を惜みて咲き継げる  
俳を残りの菊に重ねたる  
小鳥来る一樹は天に召されたる

十月五日 ウエップ俳句通信出句

邸の月俳ともに育ちゆく  
喪心は花野の一花一草に  
七草の色無き色の主張かな  
草の花白に庭園明け初むる  
思ひ出を詰め込んでゐる夜食かな  
草雲雀住宅街の片隅に

十月五日 NHK文化センター

出来秋を貫いてゆく鉄路かな  
やや寒の高層ビルを降りてくる

十月六日 蕉心会

初鴨の旅路を癒す雨かとも  
庭園に色を足しゆく秋微雨  
曇天を貫き鴨の来りけり  
槌音の奥より確と秋の声  
そぞろ寒ノースリーブの少女かな  
霧に浮くスカイツリーの孤影かな  
曼珠沙華朽ちて黄泉路を遠ざける  
曇天に弾かれてゐる鴉の声

十月十一日 大阪倶楽部

添水の音古刹の朝を引き締めて  
毒茸の色に迷ひのなかりけり  
茸飯山の消息味はへる  
忌心の育ちゆきたる添水の音

十月十三日 土筆会

柳散る明日へ命繋ぎつつ  
言霊を懐に秘め柳散る  
江戸の粋込めて新蕎麦打ちにけり

初鴨を水柔らかく受け止めて  
驚の目の狙ひし先のそぞろ寒

十月十四日 西の虚子忌

長雨の都心を発ちて秋日濃し  
露けしや経に加はる汀子の名

十月十七日 朝日カルチャー若草句会

房総の土の矜恃や落花生  
セレナーデ遠く響きて暮の秋  
街騒も惚ぶ心に暮の秋  
黒々と土淡々と落花生

十月十八日 きざらぎ会

色鳥に山の彩り重ねゆく  
色鳥や森に純正律奏で  
新米や虚子命名の酒辛し  
色鳥の声七色に響き合ふ

十月十九日 目黒学園句会

議事堂に吸ひ込まれゆく赤い羽根  
林檎食ぶりんごのやうな孫の頬  
大江戸の雲を払ひて秋深し  
赤い羽根つけて新郎新婦かな

十月二十日 北國文芸選者吟

林檎剥くよりみちのくの香りけり

十月二十日 前議員句会

朝寒に靴音乾くアスファルト  
路地裏に鴉一声そぞろ寒  
うそ寒や乗り遅れたるバス過る  
地下鉄の出口やや寒纏ひけり  
冷まじや訃報は突として来る

十月二十日 登高会

団栗や子等のポケット無限大  
温め酒恙の君を思ひつつ  
団栗を拾ふ仕草の母似かな  
天高し地球の丸さ見下して  
句心に絵心添へて秋高し  
みちのくの夜の静寂や温め酒

十月二十一日 廣邦会

馬肥ゆる蝦夷の大地を凹ませて  
生家売る話の進む秋思かな  
嘶きの声は未来へ馬肥ゆる  
十月二十一日 工業倶楽部  
添水鳴る古刹は黙を深めつつ  
椎茸を干して太陽引き寄せる

秋の声路傍の草のそよぐより

十月二十三日 青嵐会東京例会選者吟

初鴨の水尾消ゆるより陣となる  
そぞろ寒水面に重ねゆく水輪  
柳散る水面に色を映しつつ

十月二十三日 野分会東京例会

小鳥来る馴染の枝のあるらしく  
人住まぬ家の伽とし小鳥来る  
小鳥来る洗礼式の聖堂に

十月二十四日 有恒俳句会選者吟

過疎となる野山の錦遺る里  
鐵路行く野山の錦突き抜けて  
晴るる日の少なき都心そぞろ寒  
そぞろ寒庭木失せたる汀子邸

十月二十五日 若水句会

零余子蔓山気を放ちつつ引かれ  
ノクターン長月の夜を潤して  
長月の聖堂長き祈りかな  
肌寒し生家の明日を案ずれば

十月二十七日 倶楽部合同俳句会

肌寒を発ちて浪速の熱気かな

祭壇の花野と化して笑む遺影

白々と富士肌寒く彩られ  
虫すだく坂道お別れの会へ

十月三十一日 カトリック新聞選者吟

秋思解く天に弾ける子等の声

# 雑詠 廣太郎 選

死神に克ち春光に蘇る 相模原 木村享史  
 汀子師に逢うて黄泉路の花に覚む 同 同  
 死に損ねたる身いたはり春惜む 同 同  
 富士離れゆく早春の雲となり 静岡 須藤常央  
 天照大神へと山を焼く 同 同  
 トラックが走る去年の荷今年の荷 同 同  
 額縁の戦死公報草の餅 熊本 岩岡中正  
 ふるさとの山なだらかに草の餅 同 同  
 いただきし筍に竹林の風 同 同  
 花入れの一八迎へ呉るる席 大阪 酒井湧水  
 カーテンをそつと誘ふ若葉風 同 同  
 黴もまた生き物そつと拭ひやる 同 同  
 眩しさを仰げば昼の虫かすか 東京 今井肖子  
 風すべり風すべり水澄まんとす 同 同  
 爽涼や展望台は六角形 同 同  
 白雲の立ち上がらんと夏近し 枚方 中嶋陽太  
 池の面の水にも燃ゆる躑躅かな 同 同  
 ポケットに思ひ出見付け更衣同 同 同

一礼は日本の美学宮涼し 奈良 古賀しぐれ  
 奉る笙箏築の青葉風 同 同  
 雨音は神代の調べ宮若葉 同 同  
 色の揺れ菜の花畑の遙かより 大阪 徳岡美柝子  
 まだ誰も踏まぬ落花の朝を踏む 同 同  
 余花に逢ふここより絶ゆる溪の道 同 同  
 見たき夢見て満ち足りし朝寝かな 長岡 安原 葉  
 植ゑしあり吉野桜の苗木濡れ 同 同  
 今年はや吉野の谷も夏近し 同 同  
 窓よりの夜風にほどく祭髪 龍ヶ崎 今橋真理子  
 祭笛ひとすぢ乗せてくる夜風 同 同  
 母の日や母の如くに慕ひし師 同 同  
 根切虫には夜と言ふ大宇宙 神戸 玉手のり子  
 神の意に振れ文字摺草となる 同 同  
 花茨ガラシャの像にある憂ひ 同 同  
 穀象の自在に米の隙間かな 同 同  
 綿菓子に灯透けをり舟芝居 同 同  
 山裾は遙かに碧し富士桜 同 同  
 めだか飼ひクラス一つにまとまりし 同 同  
 青春の木のラケットに及ぶ黴 同 同  
 風薫るセーラー服の百の白 同 同  
 箸置をガラスにかへて夏に入る 東京 岩村恵子  
 みどり児の若葉の空を掴まんと 同 同  
 スピードや新樹晴なるハイウエイ 同 同

## 雑詠句評（九月号より）

### 退院や五月場所はや九日目 東京 今井千鶴子

五月場所は両国の国技館で行われる大相撲の本場所。夏場所とも言われる。現在はテレビの放送で全国どこにいても相撲が見られる国民的行事である。作者もこの大相撲放送を毎日欠かさず観戦しておられたのであろう。

しかし、長く入院生活を続けられていたが病気を克服し体力も回復してきた。退院の許可が五月中には出るのではと言うことで日々ハビリ運動にも励んでおられた。

いよいよ退院の許可がでて自宅に帰れたのは五月場所の九日目であった。退院できた喜びの日でもあり忘れられないのである。今後も養生して元気で過ごしたいと念じている。

（静龍）

御本人かどうかは判らないが、暫く入院なさっておられた方の

写生である。漸く退院の日を迎えると、その日は丁度大相撲九日目であった。そろそろ優勝力士が何人かに絞られてきているだろう。相撲ファンの心持ちが伝わってくる。（廣太郎）

### 桜餅婿となるかもしれぬ人 鹿児島 永里瑞代

花時に魁けて和菓子店の店先に並ぶ桜餅を目にすると、春をちよつと先取りしたような気がするものである。この句の桜餅は、おそらく作者の娘の交際中の青年のお持たせなのであろう。娘が二人いる私にとつて、分かりすぎるほどよく分かる情況である。何処となくぎこちない雰囲気ながら、桜餅の匂いとほんのりピンク色が明るい雰囲気を与える。「婿となるかもしれぬ」が、やがて、ビールで乾杯ということになりそうな予感を漂わせる。

（眞理子）

御嬢様が恋人として連れて来られた男性である。前以て予告されていたのか、突然連れて来られたのかは判らないが、母親としては何とも複雑な心境であっただろう。桜餅を食べながら、男性からプロポーズはあったのだろうか。（廣太郎）

### 虚子忌句座清記散華の如くあり 龍ヶ崎 今橋眞理子

四月八日は高濱虚子の忌日である。

散華は、仏を供養するために花を散布する仏事で、蓮の花びらを模した紙製の五色の蓮華の花弁をまき散らすこと。

さて掲句、この日、本堂で法要が行われ、その後、句会が催されるが、全国各地から参集された著名な俳人の投句が清記されるが、そのための、句稿の清記の厳肅な一場面が諷詠されたものである。

清記には原句尊重という原則がある。

本堂一杯の俳人、控えの間に膝を寄せあつての句座。

投句、清記、披講、名乗り……、極めて厳肅な句が授かつた。

(とは歩)

コロナ禍の前に鎌倉の寿福寺で行われていた虚子忌は毎年百人以上、多い時には五百人を超える参会者があつた。その人数でも句会が行われ、何百枚もの清記用紙が回されたのである。正にこの句がその情景を如実に語っている。(廣太郎)

### 入学を駅に見送る母 泪 長岡 安原 葉

四月になると「入学」という行事が日本国中の小、中、高、大学といたる所で行われる。一時は外国の習慣に合わせるように六月に卒業式、九月に入学式を試みかけたこともあると聞いたことがあるが、実現されなかつた。四月の入園式、入学式、入社式は揺るぎ無い。日本の大きな行事は全て四月に行われる。「駅に見

送る」という措辞からここの「入学」は大学だろう。「母」として入学を歓びながらも、家を出て独立していくことに

やはり、一抹の寂しさを感じるのは当然のことだろう。「泪」を隠していた「母」も駅に見送る時はどうとうこらえきれなかつたのだ。(むつみ)

志望校へ、難しい受験を乗り越えて入ったお子さんであるが、学校は親元を離れなければならない遠い場所にあるのだろう。その学校への入学を前に駅へ送り出す母親の複雑な心境がこの句からひしひしと伝わってくる。(簾太郎)

### 喧嘩してたつぷり擦りおろす山葵 大阪 酒井湧水

たつぷりとは、一読して山葵の刺激が鼻の奥につんとくる一句。上五からいろいろ想像がふくらむが、この涙は悔しいからでも悲しいからでもなく山葵の香りが目にしみていて、と思いたくて必要以上に摩りおろしてしまったのかもしれない。決して、大量の山葵入りの何かを喧嘩した相手に食べさせようなどという子供じみた考えではない、だろう。(肖子)

喧嘩して未だ蟻りが解けないでいる時に、何かを食べさせるといふシチュエーションである。些細な悪戯心であろうが、たつぷり山葵を擦りおろして、握り鮎にでも大量に挟むのだろうか。食べさせられた人の顔が想像出来る。(廣太郎)